

財務総合政策研究所
インドワークショップ
2023年4月27日

インドの対外関係 2022－2023 「グローバル・サウス」を中心に

中京大学
総合政策学部／経済学研究科
溜 和敏（たまり・かずとし）

配布用資料／転載、引用、再配布は不可

構成

1. インド対外戦略の基礎知識
2. ロシア・ウクライナ戦争をめぐるインド
3. インドの「グローバル・サウス」戦略
4. インド北東部コネクティビティへの日本の取り組み

1. インド対外戦略の基礎知識

インド外交史：概略

1. 1946～1962：「楽観的」非同盟 → 印中国境紛争
2. 1962～1971：アメリカ接近 → 第3次印パ戦争
3. 1971～1991：ソ連との「ほぼ同盟」 → ソ連崩壊
4. 1990年代：戦略的自律性へのシフト → 核実験、カールギル
5. 2001?～2014：多角連携 → アメリカ後退、中国台頭
6. 2014～現在：多角連携、中国との対立、プルーリラテラリズム

Jaishankar, *The India Way* (2020) に基づく報告者による整理

※ →の右側は、その後のフェーズに入る主な転機を示す

インドの外交枠組み（1）

種類

- 世界
- 地域機構
- プルーリラテラル（ミニラテラル）
- 二国間

インドのおもな地域協力枠組み

参加年	名称
1985	南アジア地域協力連合 (SAARC)
1992	インド・ASEAN (対話パートナー開始年)
1995	環インド洋地域協力連合 (IORA)
1996	ASEAN地域フォーラム
1997	ベンガル湾多分野技術経済協力イニシアチブ (BIMSTEC)
2007	東アジアサミット
2008	インド・アフリカ・フォーラム・サミット (IAFS)
2012	インド・ラテンアメリカ・カリブ諸国共同体 (CELAC)
2015	上海協力機構 (SCO) ※
2022	インド太平洋経済枠組み (IPEF)

補足：インドとSCO

- 2005年：オブザーバー参加（パキスタン、イランと同時）
- 2006年：国家元首級会合@上海に石油・天然ガス相派遣（「石油相事件」）
- 2015年：正式加盟

- インドにとっては中央アジア政策として：コネクティビティ、貿易、エネルギー、対テロ、信頼醸成
- インドの中央アジア政策 = 「コネクト中央アジア」（2012年）
- 反欧米連合としてのニュアンスはインド側に無い
- 基本的にはバイの場としても期待していない
- 事実上の敵国である中国やパキスタンも加盟国：とくにパとの接点、圧力、牽制の場としての意味はある

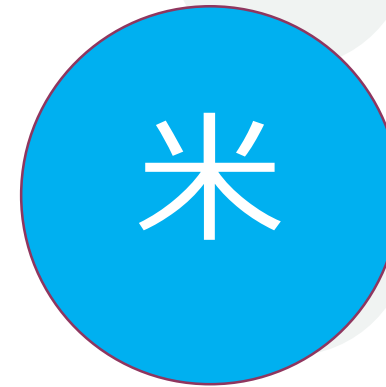
インドのおもなブルーリテラル枠組み

開始年	名称	参加国、機関
2002	RIC	ロシア、インド、中国
2003	IBSA	インド、ブラジル、南アフリカ
2005	G4	インド、日本、ドイツ、ブラジル
2006	BRICs	ブラジル、ロシア、インド、中国
2007	QUAD 1.0	インド、日本、アメリカ、オーストラリア
2011	BRICS	ブラジル、ロシア、インド、中国、南アフリカ
2015	JAI	日本、アメリカ、インド
2017	QUAD 2.0	インド、日本、アメリカ、オーストラリア
2021	I2U2	インド、イスラエル、アラブ首長国連邦、アメリカ

出所：報告者作成



G20



SCO

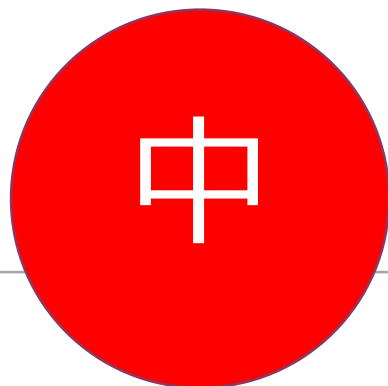
BRICS
RIC



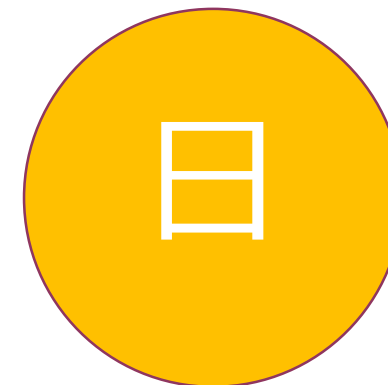
QUAD
JAI

インド太平洋

IPEF



ASEAN
関連



(インプリケーション)

- 多極化志向 : with China

↓ Modi政権以降？

- 対中バランスिंग : against China
 - 従来のバランス維持が困難 (ジャイシャンカル 2022)

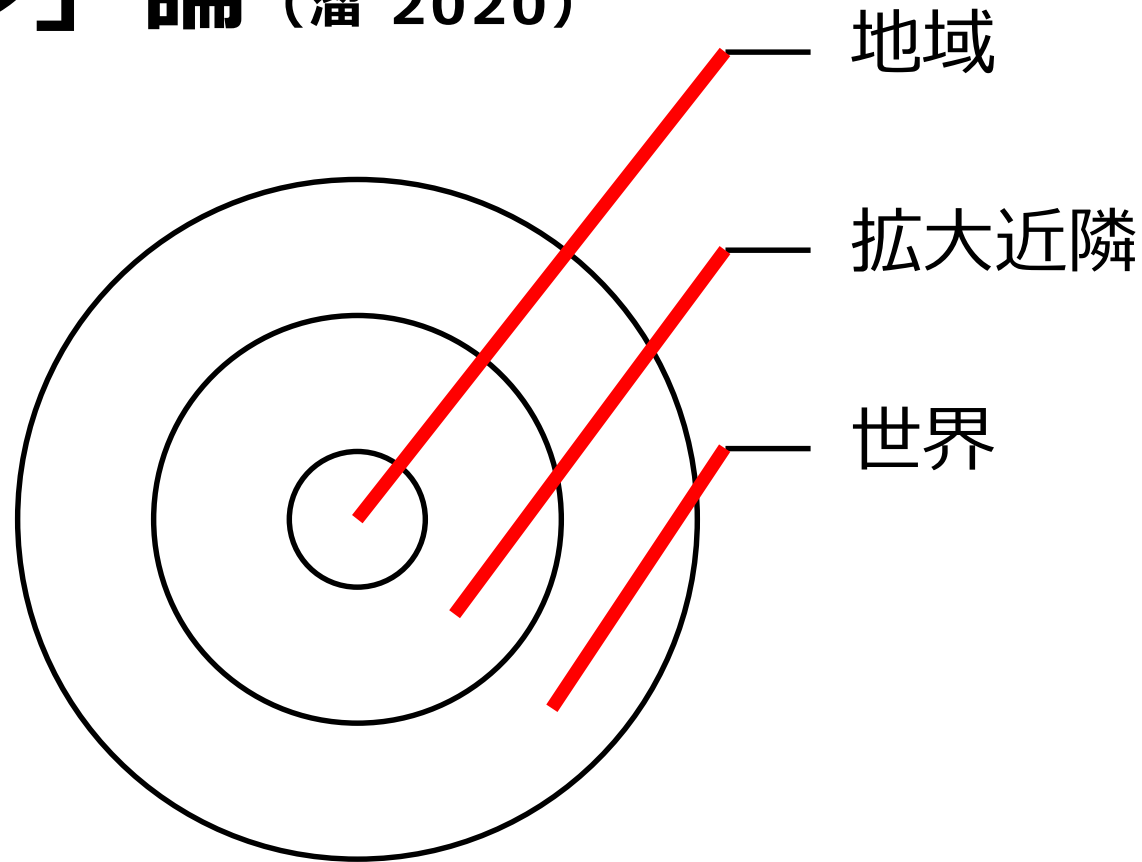
インドの戦略的パートナーシップ

年	相手国、機関（同年に複数ある場合は50音順）
1997	南アフリカ
1998	フランス
2000	ロシア
2001	アメリカ※、ドイツ
2003	イラン
2004	EU
2005	インドネシア、中国、日本※
2006	ブラジル
2007	ヴェトナム、ナイジェリア
2009	オーストラリア、カザフスタン
2010	韓国、サウジアラビア、マレーシア
2011	アフガニスタン、ウズベキスタン
2012	ASEAN、タジキスタン
2015	アラブ首長国連邦、イギリス、オマーン、カナダ※、 シンガポール、セイシェル、モンゴル
2017	イスラエル

出所：報告者作成

インドの外交枠組み（2）

「3つの秩序」論（溜 2020）



- (1) 地域：SAARC、インド洋への拡大、（パキスタン外し？）
- 地域の超大国 ⇒ 現状維持勢力としてのインド
 - 影響力を行使できていないはがゆさ
- (2) 拡大近隣：ロシアを除くアジア ⇒ インド太平洋へ？
- 中国に対する脅威認識の強まり（ex. 真珠の首飾り）
 - 中国による支配拡大への抵抗 ⇒ 現状維持勢力として
- (3) 世界：世界全体
- 非同盟運動、脱植民地主義の伝統
 - 「国際秩序の民主化」の論理 ⇒ 現状変革勢力として

(インプリケーション)

- かつて、インドの対中政策の多元性を説明するうえで役立っていた：拡大近隣では対立も、世界では共闘（例：堀本武功「アンビバレントな印中関係」）
- 印中関係の険悪化にともない、世界レベルでも協力が困難に：2020年のガルワンで決定的になるが、それ以前からその傾向や観察

2. ロシア・ウクライナ戦争を めぐるインド

インドの対応

- ロシアを名指しでは非難せず、外交による平和的解決を求める
- ロシアからの石油輸入の拡大
- 2022年2月～：国連安保理、総会でのロシア非難決議を棄権
- 3月：バイデン大統領「クアッドでshakyなのはインドだけ」
- 5月：QUADサミット@東京、ロシアへの立場の違いを確認
- 9月：SCOでモーディー首相からプーチン大統領に「戦争の時代ではない」発言
- 11月：G20サミット、インドの立場を盛り込ませる

なぜロシアとの関係を維持するのか？

- 当然の判断としての受け止め
- さまざまな理由が論じられる：主に外部で
 - ① 二国間関係
 - ② 多国間関係
 - ③ 国内要因
- 主観的要因も：自国の国益を犠牲にする謂われはない

① 二国間関係

- 相互にほとんどメリットしかない協力関係、損ねてはならない関係
- 伝統的な外交協力関係
 - 1970年代～80年代：インドとソ連は実質的同盟関係
 - 冷戦終結後に再定義、印中ロRICによる多極化枠組み
 - 「特別かつ特恵的なspecial and privileged」 戦略的パートナーシップ
- 兵器調達での依存
 - 長年の輸入により兵器体系が依存；近年は輸入比率低下
 - 2012-17年は69% → 2017-21年は46% (SIPRI)
 - インドは国産化図る；2020年以来輸入禁止（＝国産化）リストの拡大
- 原子力などエネルギー分野などでも協力は顕著（次）
- 肥料の輸入でも依存（2021年12月プーチン訪印：兵器、石油、肥料）

② 多国間関係

- 中国との関係のためにロシアが必要、の論理（次）
- 「多角連携」による「戦略的自律」戦略
 - RIC、BRICSはグローバル政治での連携
 - 上海協力機構はおもにエネルギー分野
 - インド太平洋、クアッドで対中連携、コネクティビティ
- 欧米と中ロの間でどっちつかず、ではない
- 脅威 = 中国：海の脅威と陸の脅威

インドの対中脅威

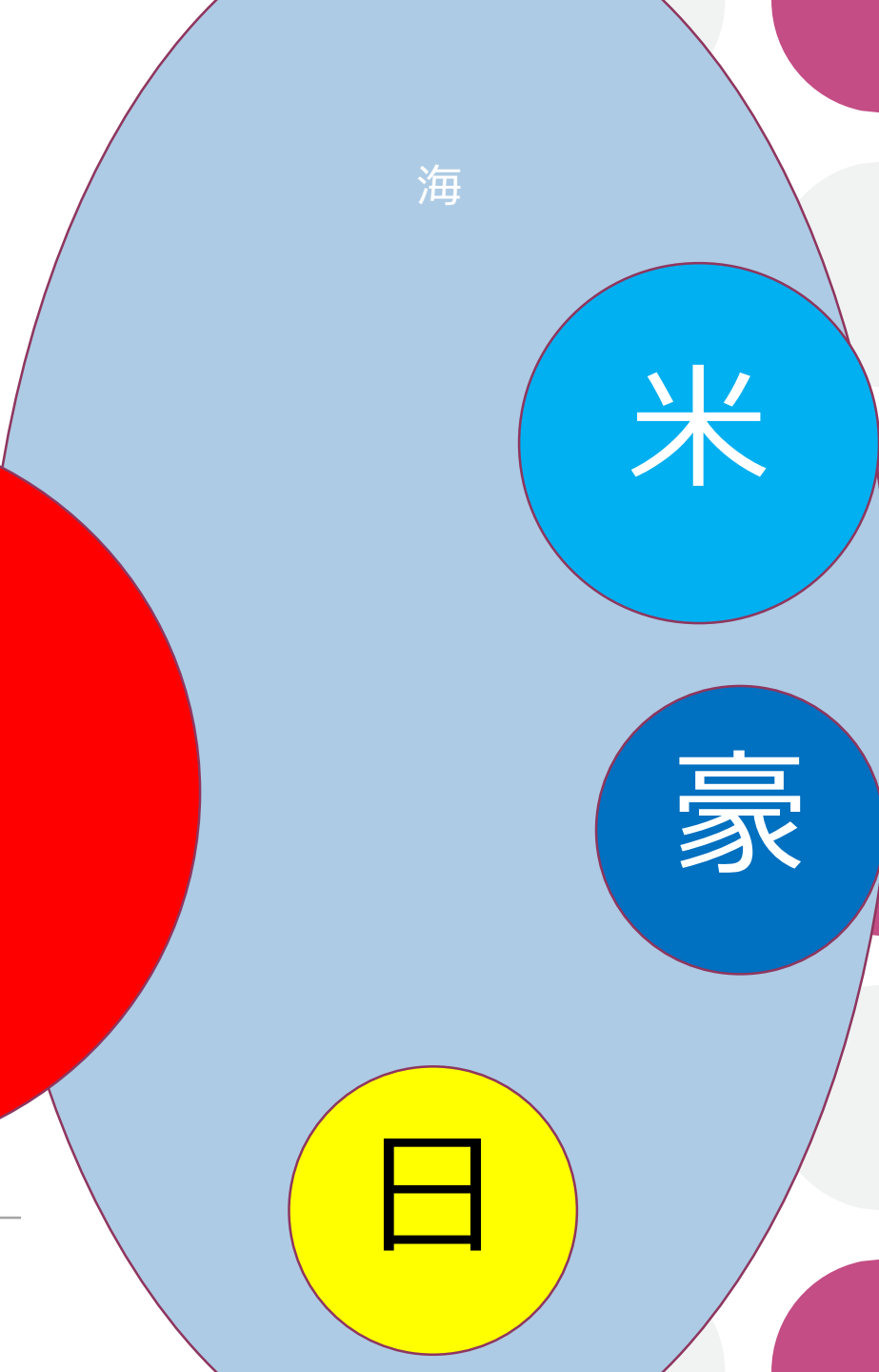
- インドにとっての最大の脅威は中国（with パキスタン）
- 大陸：核心的利益を脅かす切迫した脅威
 - ロシアとの協力の必要性、QUADの有効性は限られる
- 海洋：拡大近隣エリアの将来の脅威、海での優越性（Jaishankar）
 - QUAD、インド太平洋による対応

パ

露

印

中



海

米

豪

日

(インプリケーション)

- 前提：大陸勢力と海洋勢力の区別
- 中国と向きあうためにはロシアが必要
- 2022年以降、ロシアが孤立化するなかでは中国と改善の必要性？
- 「中露」vs「印」は避けるべき
- 「中露パ」vs「印」はさらに最悪

③ 国内要因

- 前提条件として
 - Modi・BJP政権の政治的選好：内向き、徹底的な権力志向
 - メディア統制の強化：少数派抑制、メディアによる忖度？
 - パキスタン・アフガニスタンを除く対外関係は基本的に外務省マター
 - コロナ禍での社会混乱の継続（ただし政権支持は強固）
 - 低い世論の関心と報道
- エネルギー、肥料の重要な供給源としてのロシア
- 世論の過半数も政府の「棄権」路線を支持
 - （もともとロシアへの好印象あり）

エネルギー

- インド国内のインフレ、エネルギー危機（2021年）
- 原発などで協力も、原油輸入は少なかった（2021年、2%）
- ロシアから堂々と買いつづける姿勢
- Jaishankar外相「インドが1ヶ月にロシアから購入する石油の総量は、おそらくヨーロッパが1日の午後に購入する量よりも少ない」

3. インドの「グローバル・サウス」 戦略

急造「グローバル・サウス」外交

- 2022年12月：G20議長国就任、モーディー首相声明
- 2023年1月：「グローバル・サウスの声サミット」開催
- 2月：G20財務相・中央銀行総裁会合
- 3月：G20外相会合
- 5月：G7サミット@広島（予定）
- 9月：G20サミット@デリー（予定）

インド「グローバル・サウス」外交の展開

インド外交の新たな軸として注目されるグローバル・サウス。その背後にある情勢認識と戦略を読み解きながら、日印（G7とG20）連携の可能性を探る。鍵となるのは、インド太平洋における信頼醸成を高めつつ、グローバルな領域でも具体的協力を積み重ねることだ。

- 拙稿、雑誌『外交』 Vol. 78, Mar./Apr. 2023号
- 2022年12月のG20議長に際して、唐突に言い始めた「グローバルサウス」
- 12月1日、モーディー首相声明（寄稿）
- 「One Earth, One Family, One Future」
- 世界の分断によって犠牲となっているグローバル・サウスの声を届ける

インド「グローバル・サウス」外交の展開

インド外交の新たな軸として注目されるグローバル・サウス。その背後にある情勢認識と戦略を読み解きながら、日印（G7とG20）連携の可能性を探る。鍵となるのは、インド太平洋における信頼醸成を高めつつ、グローバルな領域でも具体的協力を積み重ねることだ。

- 2023年1月：「グローバル・サウスの声サミット」
- インドによるオンライン開催、125ヶ国参加
- G20諸国は含まず
- 中国抜き新たな「グローバル・サウス」
- インド外務省による問題意識：「新型コロナウイルス感染症や、進行中のウクライナ紛争、債務の累積、食料やエネルギー安全保障の問題などの近年のグローバルな出来事は、発展途上世界に深刻な影響を及ぼしてきた。発展途上世界の懸念は、グローバルな舞台においてしかるべき注目や場を与えられることが少なかった。また、関連する既存の仕組みは、これらの発展途上国の懸念や課題への対応に不十分であることは明らかにされてきた」

インド外交の新たな軸として注目されるグローバル・サウス。その背後にある情勢認識と戦略を読み解きながら、日印（G7とG20）連携の可能性を探る。鍵となるのは、インド太平洋における信頼醸成を高めつつ、グローバルな領域でも具体的協力を積み重ねることだ。

《背景》

- アジア関係会議（1946年）、アジア・アフリカ会議（1955年）以来の「非同盟」の伝統
- 「非同盟」は対外戦略として「死語」
- 国民会議派ネルーの戦略としてBJP政権は特に忌避
- 2020年、非同盟諸国会議にモーディー首相オンライン出席

《考察》

- ロシア・ウクライナ戦争による国益重視の弁明で苦しくなった外交に格好の新たな論理
- G20議長用の戦略として採用

インド外交の新たな軸として注目されるグローバル・サウス。その背後にある情勢認識と戦略を読み解きながら、日印（G7とG20）連携の可能性を探る。鍵となるのは、インド太平洋における信頼醸成を高めつつ、グローバルな領域でも具体的協力を積み重ねることだ。

《インプリケーション》

- インドのグローバル秩序戦略は、21世紀当初のBRICS連携から、「グローバルサウス」を基調としたものへ？
- 冷戦時代：「非同盟」
- 21世紀初頭：RIC、BRICSによる新興国連合
↓
- 現在：「グローバル・サウス」？
- 示唆：拡大近隣のレベルとは別次元？

4. インド北東部コネクティビティへの 日本の取り組み

北東部開発協力の進展

- 2014年：モーディー政権発足、「アクト・イースト」政策、北東部開発をめぐる日印協力合意

※ 同年、日＝バングラ「ベンガル湾産業成長地帯（BIG-B）」

- 2015年：日本「質の高いインフラパートナーシップ」
- 2017年：在デリー日本大使館とインド外務省による「アクト・イースト・フォーラム」発足
- 2023年3月：日印首脳会談、「インド北東部における日印持続可能な開発イニシアティブ」、FOIP新政策

North East: Main ODA projects

As of June, 2022

Sikkim

- Biodiversity Conservation and Forest Management (5.384 billion yen; 2010.03)

Assam

- Guwahati Water Supply Project (29.453 billion yen; 2009.03)
- Guwahati Sewage Project (15.620 billion yen; 2014.11)
- Construction of a Vocational Training Center for the Poor women in Kamrup (9.9 million yen; 2016.03)
- North East Road Network Connectivity Improvement Project(Phase 5: 15.285billion yen, 2021.03)
- Assam Health System Strengthening Project (45.605 billion yen; 2022.3)

Assam/ Meghalaya

- North East Road Network Connectivity Improvement Project (Phase3:25.483 billion yen; 2018.10) Dhubri- Phulbari Bridge

Meghalaya

- North East Road Network Connectivity Improvement Project (Phase1: 67.170 billion yen; 2016.03/ Phase 2: 38.666 billion yen; 2017.09) NH-51 (Tura – Dalu)/NH-40 (Shillong – Dawki)
- Project for Renovation and Modernization of Umiyam-Umtru Stage-III Hydroelectric Power Station (5.497 billion yen; 2018.10)
- Community-Based Forest Management and Livelihoods Improvement (10.397 billion yen; 2020.03)

Tripura

- Sustainable Catchment Forest Management Project (12.287 billion yen; 2018.10)
- North East Road Network Connectivity Improvement Project (Phase4 :14.926 billion yen; 2020.03/Phase 6: 23.129 billion yen; 2022.3) NH-208 (Kailashahar– Khowai)/NH-208(Khowai – Saroom)

Total ODA loan: over 315 billion yen (appx: INR 19,142 crore) (converted at the exchange rate of June, 2022)

✂only the sum amount of yen loan

North East

- India-Japan Initiative for Strengthening Bamboo Value Chain in the North East (Technical Cooperation; 2022.03)

Nagaland

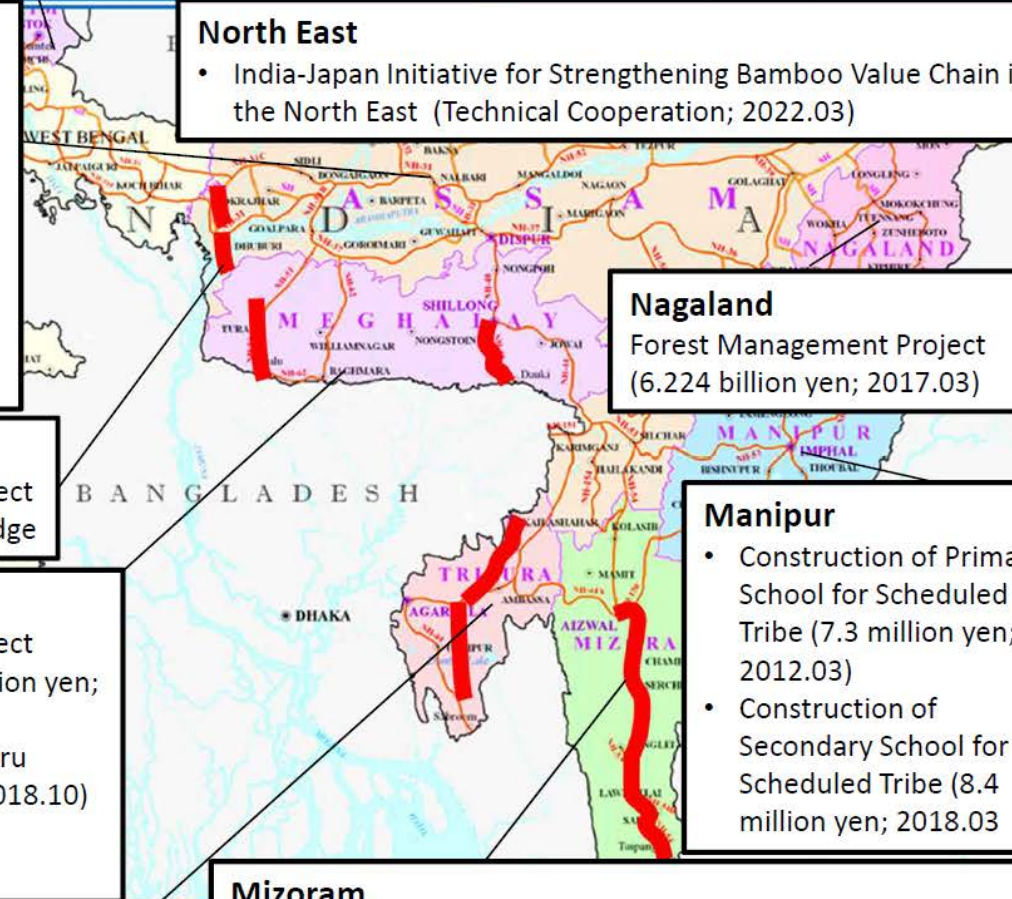
- Forest Management Project (6.224 billion yen; 2017.03)

Manipur

- Construction of Primary School for Scheduled Tribe (7.3 million yen; 2012.03)
- Construction of Secondary School for Scheduled Tribe (8.4 million yen; 2018.03)

Mizoram

- North East Road Network Connectivity Improvement Project (Phase1: 67.170 billion yen; 2016.03/ Phase 2: 38.666 billion yen; 2017.09) NH-54 (Aizawl – Tuipang)
- Project on Capacity Enhancement for Sustainable Agriculture & Irrigation Development in Mizoram (Technical Cooperation; 2016.10)



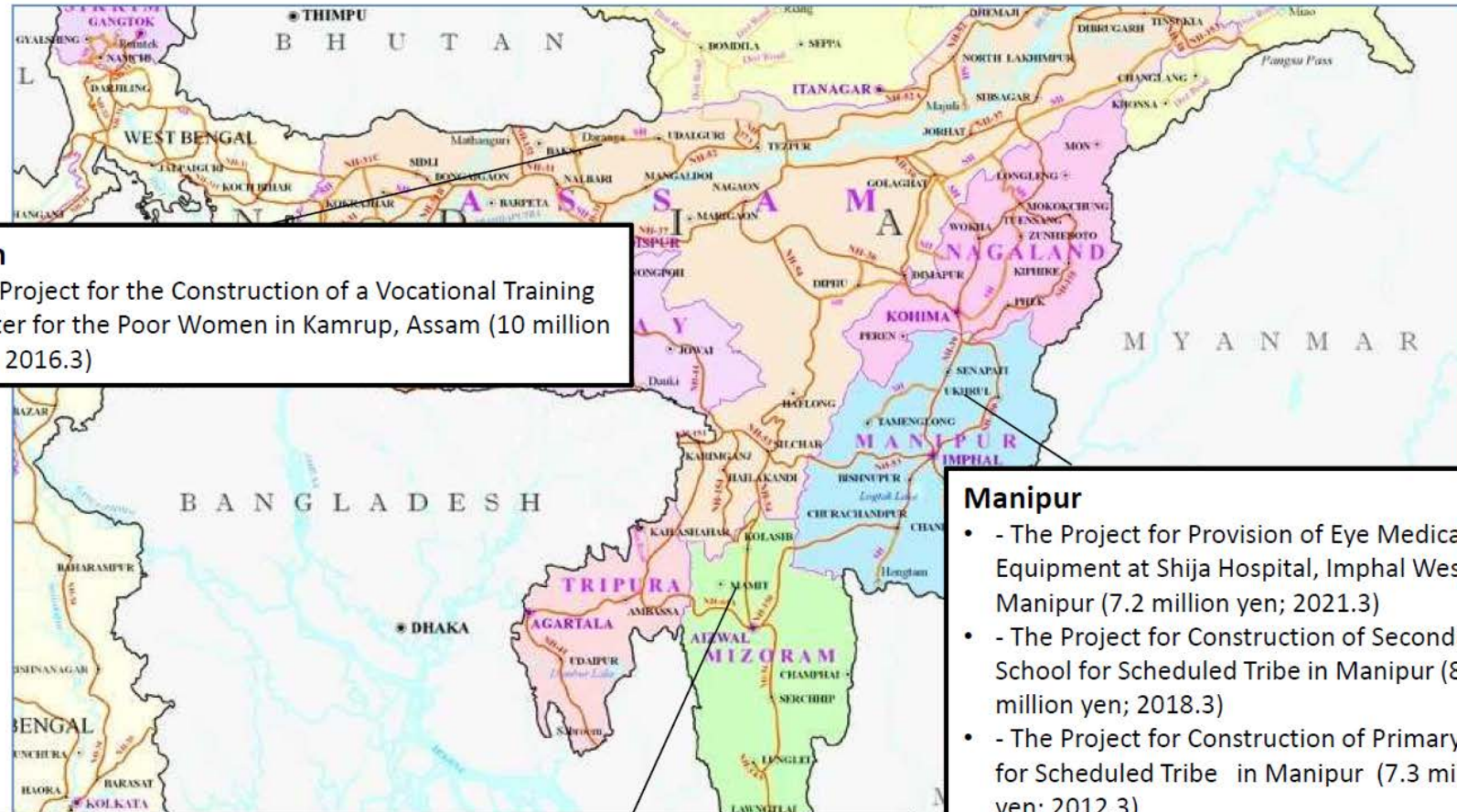
Source:

<https://www.in.emb-japan.go.jp/files/100365122.pdf>

North East: Main Grant Assistance for Grassroots Projects

As of June, 2022

Total : 39.9 million yen
(appx: INR 24.2 million)
(converted at the exchange rate of June, 2022)



Assam

- The Project for the Construction of a Vocational Training Center for the Poor Women in Kamrup, Assam (10 million yen; 2016.3)

Manipur

- - The Project for Provision of Eye Medical Equipment at Shija Hospital, Imphal West, Manipur (7.2 million yen; 2021.3)
- - The Project for Construction of Secondary School for Scheduled Tribe in Manipur (8.4 million yen; 2018.3)
- - The Project for Construction of Primary School for Scheduled Tribe in Manipur (7.3 million yen; 2012.3)

Mizoram

- The Project for the Construction of Community Health Clinic in Khamrang Village, Kolasib District, Mizoram (7.0 million yen; 2015.3)

Source:
<https://www.in.emb-japan.go.jp/files/100365122.pdf>

India-Japan Intellectual Conclave: North East India, Bangladesh and the Bay of Bengal in the Indo-Pacific

- 2023年4月11-12日、トリプラ州アガルタラで現地開催
- 同知的対話として3回目（1, 2回目はオンライン）
- 報告書 *Assessing Connectivity between Northeast India and Bangladesh: Towards a Prosperous Bay of Bengal Region*
- 時事通信「[「インド太平洋」を内陸へ 日本、インド北東部開発に注力—投資呼び込み、中国封じ込めも](#)」2023年4月18日

取組の柱③：多層的な連結性

事例②⑨：ベンガル湾からインド北東部を繋ぐ産業バリューチェーンの構築

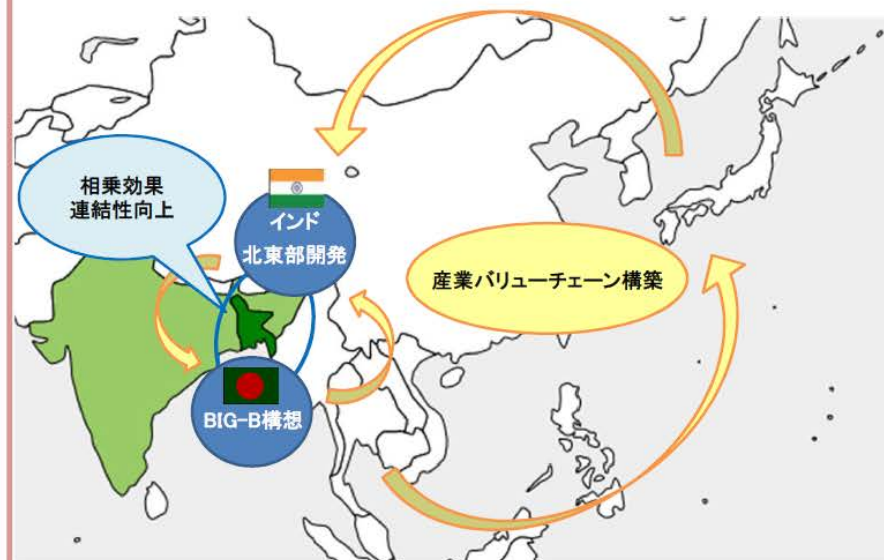
1. 基本的な考え方

- 日本は、インドが提唱する「インド太平洋海洋イニシアティブ（IPOI）」における「連結性」の柱のリード国。また、これまで「日印アクト・イースト・フォーラム」等を通じ、内陸に位置するインド北東部開発を支援。
- バングラデシュとの間ではベンガル湾産業地帯（BIG-B）構想の下、日本はマタバリ深海港の開発や同港とチョットグラムとダッカの連結を支援。
- こうした枠組みにおける協力を一層推進するとともに、両枠組みの成果物を有機的に連携させることによる相乗効果を通じて、ベンガル湾地域における連結性の更なる向上を図る。

⇒ ハード・ソフトの連結性支援に加え、民間投資の促進も加えた包括的なコンセプトを追求することにより、インド北東部を海に繋ぎ、印バ両国をまたぐビジネス・産業を育成。併せて、インフラ建設後、日本の産業界も裨益する産業バリューチェーンの構築を目指す。

2. 具体的な取組

- ベンガル湾からインド北東部を繋ぐ産業バリューチェーン構築の戦略的重要性に関する理解の促進。
（例）インド北東部及びバングラデシュ政府、民間を交えたトラック2の開催。日本企業への関心喚起。
- 同地域の連結性インフラ（ソフト・ハード）の強化
（例）「インド北東部の持続可能な開発に向けた日印イニシアティブ」。バングラデシュのインフラ開発における日印協力（道路網・鉄道網整備等）。ベンガル湾産業地帯（BIG-B）構想の下での日バングラデシュ協力。
- 日・バングラデシュ経済連携協定に向けた共同研究促進。
- 同地域との人的交流の強化
（例）JENESYSを通じた青年招へい。シンクタンクとの連携強化。



メグナ第2橋（バングラデシュ）

（写真提供：大林組・清水建設・JFEエンジニアリング・IHインフラシステム共同企業体）



マタバリ深海港（バングラデシュ）

Source:

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/100477378.pdf>

まとめ

- ロシア・ウクライナ戦争の勃発に際して、インドはロシアとの関係を維持する対応を行っている。アメリカや日本、オーストラリアとの戦略的協力を強化する方針に変わりはないが、「戦略的自律」が基本戦略であることをあらためて印象づけた
- 2022年末からのG20議長に際して、新たに「グローバル・サウス」戦略を採用した。国益のためにロシアとの関係を維持せざるを得ないことを正当化する論拠となっている。対中関係の険悪化により躓いていた世界レベルの外交戦略の再構築とも考えられる
- 新たな日印関係の焦点として、北東部開発が進められている

主な関連文献 ① 報告者によるもの

- 溜和敏「インドの複層的秩序認識と対外戦略」佐橋亮編『冷戦後の東アジア秩序：秩序形成をめぐる各国の構想』勁草書房、2020年
- 溜和敏「[インドが見るポスト・コロナの世界](#)：『The India Way』を手がかりに」『現代インド・フォーラム』Vol. 47（2020年10月号）
- 溜和敏「[現代インドの対外戦略における「自律」・「自立」の思想](#)」『安全保障研究』Vol. 3, No. 3（2021年9月）
- 溜和敏「[インドにとってのクアッド：日本からの視点](#)」nippon.com、2022年
- 溜和敏「[インド外交の「プルーリラテラリズム」](#)」日本国際問題研究所、2023年
- 溜和敏「[インド「グローバル・サウス」外交の展開](#)」『外交』Vol. 78（2023年3／4月）
- Kazutoshi Tamari, "Japan-India Relations in Japan's Notion of Indo-Pacific: Genesis, Difference and Convergence," Srabani Roy Choudhury, ed., *Japan and its Partners in the Indo-Pacific: Engagements and Alignment* (Routledge India: 2023)

主な関連文献 ② 主な邦語図書

- 伊藤融『新興大国インドの行動原理：独自リアリズム外交のゆくえ』慶應義塾大学出版会、2020年
- 伊藤融『インドの正体：「未来の大国」の虚と実』中公新書ラクレ、2023年
- 笠井亮平『第三の大国インドの思考：激突する「一带一路」と「インド太平洋」』文藝春秋、2023年
- S・ジャイシャンカル（笠井亮平訳）『インド流：外交の流儀』白水社、2022年
- 田所昌幸編『素顔の現代インド』慶應義塾大学出版会、2021年
- 堀本武功『インド 第三の大国へ：〈戦略的自律〉外交の追求』岩波書店、2015年
- 堀本武功編『現代日印関係入門』東京大学出版会、2017年
- 堀本武功ほか編『これからのインド：変貌する現代世界とモディ政権』東京大学出版会、2021年